
バカと妖魔と召喚獣～狼少年と白き鹿～

OOO · JANIKELU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと妖魔と召喚獣／狼少年と白き鹿／

【NZコード】

N8448Z

【作者名】

OOO・JANIKELU

【あらすじ】

昔…蒼き狼と白き鹿…そして黒い妖魔がいた

舞台は学園！敵は仲間達？妖魔に取り付かれた人を救うために吉井明久とおなじみのメンバーが立ち上がる！これは馬鹿な少年が悩みを抱えた人に出会い、解決し…仲間達とAクラスを目指す恋愛バトル！メーデイ！シリアルス、裏描写を突き抜け限界までを目指します！（笑）

第零問・プロローグ（前書き）

「ねえ……もし……命があと一日しかなかつたらあなたならどうす
る？」

第零問・プロローグ

「きやつ……！」

ある時、一人の少女が足を滑らせ神社の階段から落下する…。この如月神社は滑りにくいのだが…誰かがゴミを必ず捨てていくと言わ
れている

「…………！」

少女は目を瞑り衝撃に備えた

ある日…少女は神社へ向かつた…彼女は文月学園出身の高校一年生である

名は琴吹　由莉奈　（ことふき　ゆりな）

吹奏楽に入つていて…毎日を懸命に生きるとても優しく頑張りやな少女だ

「」

由莉奈は軽いステップで神社へと向かつ林の道を通る…文月学園のブレザーが光に照らされ良い具合に綺麗で、スカートもはためいている

由莉奈は毎日、この神社へと向かう

由莉奈は幼い頃、幼なじみがいた…とても優しく勇敢な男の子だ…しかしある時、重い病にかかり、彼女は必死にこの神社に毎日祈つていた

結果、彼は再び元気な姿で毎日を生きている

『神様ありがとう…』

由莉奈はそれからとこりもの毎日、幼なじみを助けてくれた神社へ
とお参りに行くのだ

「神様…待つてね！」

由莉奈は階段をリズム良く登つて行く。少し最近部活で習つた歌を
口ずさみながらタンタンと規則よく

ズルツ

「え…？」

あと一段といつ所でお菓子の「パリ」引つかかり滑つてしまつた…そ
のまま尻餅をつくわけではなく真っ逆さまである
この神社の階段はかなり急だ…毎日登つてる人にとっては訳ない
が落ちるとなるととても危険な階段である

（助けて………）

由莉奈はぎゅっと目を瞑つ必死に祈る…死にたくない…それだけを
祈つていた

ボスンッ

彼女はそつと目を開ける…ぶつかってはおらず何かに支えられていた

「大丈夫か？」

「……あ……」

そつと降ろされ由莉奈はすかさず声の主を見た。が、彼は既に背を向けて歩き出した

「文月学園の制服…………」

由莉奈はただ彼の背中を洩れるまで眺めていた。

彼の名は吉井明久。由莉奈と同じ一年であり、同じ学園の生徒であった

由莉奈は知らなかつた。これが彼との四年ぶりの再会だと言つ」と
に

設定など

皆さんどうもー！ということで新しい小説のスタートです
バカ恋があるので更新は遅めになります

以下からは設定についてです

話しあ戦いと恋愛です！しかし戦いの方はほとんど残酷です
明久×オリです！

明久はあることにより口調や性格が変わっています
雄一と明久は雄一の妹のおかげで対立が少ないです
バカテスのあるメンバーは特殊な力があります

以下が気に入らない方はお戻りください
バカ恋並みに甘さシリアルをを目指してますので苦手な方はコーヒー
をお忘れなく（笑）

第一章・ゆりなシロジカ（前書き）

「会いたい…ただそれだけだった」

「運命…そんなものはないと思つていた」

第一章・ゆりなシロジカ

昔、天を支配する蒼き狼がいた……気高くそして素晴らしい生き物だった

同じく地を支配する白い鹿がいた……清らかでそして美しい生き物だった

二匹は結ばれ子孫を産む……そしてこの世に蒼き狼と白き鹿と契約した者が誕生したのだった

それとは別に……海を支配していた妖魔が存在していた。妖魔は妖怪に似た化け物で人に取りつき苦しめる

蒼き狼と白き鹿はその妖魔を喰らう……それが使命であり、彼らの宿命なのだから

同様に契約した者もしかり……そして妖魔との争いは未だに終わりを告げてはいない

・再会と試験召喚戦争と蒼い狼

春……それは新たなスタートを切るにふさわしい季節だ……僕、吉

井明久は今年私立文月学園で二度目の学園生活を送る

振り分け試験を終え、それこそんびりしすぎたせいだろう……ゲームをやりすぎて遅刻をしかけていた

「……はあ……」

ゆっくりと両脇に咲く桜達に祝福されながら坂を上る。まあ今年も満開に咲いたもんだ
しばらく歩いていると校門が見えてくる

……の一歩を踏み出した時、新しい学園生活が始まる！

「遅刻だ吉井！」

「…………西村！」

ぐわああ！まさかとは思っていたけどあいつが振り分け試験結果を配ってるなんて……いきなり不幸だ！

ガツン！

「だあつ！何するんだ！」

「西村先生と呼べ！全く貴様は去年の冬からおかしくなりおつて……」

「…………」

言いたいけど言えない……僕が変わった理由なんて誰も信じてはくれないのだから

「まあいい。それより振り分け試験の結果だ」

「ああ……やつぱりか」

「やうだ……吉井一言いいか？」

西村の声に頷きながら封筒をピリピリと破していく。振り分け試験

というのはまあクラスを決める為のものだ

良い奴にはAクラスで豪華な生活、最下位の奴には最低な設備での生活。全くババアの考えることはわからない

「去年からお前を見てきて吉井は少し変わったがやっぱり馬鹿

じゃないのかとすつと思つていた

「は？何を言つてゐんだ。そんな訳ないだろ？今にあんた『節穴』つて呼ばれるぜ？」

「ああ…そつ言われてもおかしくないな

「はは…わかれればいいんだ」

ゆつくりと封筒から紙を取り出しパラリと開いた

吉井明久 Fクラス

「吉井、お前は馬鹿だ」

こつして最悪最低の学園生活がスタートしたのだつた…正直何かの間違いだと信じたいが…この後の出会いは間違いではなかつたのかもしれない

ちなみに紹介しておくと、こつの名前は西村…まあみんなからは鉄人と呼ばれていたりする

その理由は、く簡単でトライアスロンが趣味だからだ…そしてこの鋼鉄の体…鉄人と呼ばれるのはそつと言つた理由からである

「でもな吉井…お前のやつたことは胸を張つていいと先生は思つて
いる」

「西村……」

「西村先生だ…ほら、早く『すみません！』遅刻だぞ！」

西村の怒鳴り声が響き何だらつと進んでいた足を止めた

「琴吹か。今日はどうしたんだ」

「あう…恥ずかしい話なんですが…寝坊しちやつて」

「はつはつはーそりや恥ずかしいな

「わ、笑わないでくださいよー！」

あの西村が笑つた……何だ？今日は何かやばいことでも起きたのか！？まさか…僕は死んじゃうの！？

「じゃあ…失礼します！」

「おひ。頑張れよ」

話が終わつたのか琴吹と言う奴はどうぞんこっちへ向かつて来る… 橙色の綺麗な長い髪が揺れて思わず目線がそっちにいってしまう…

「ん？…吉井君？」

「…………え…？」

突然話しかけられたと思つたら琴吹がじつと覗き込んでいた
しかも…その声は懐かしい

「あ…やっぱり吉井君だ…。久しぶりだね！…といふことはあの時助
けてくれたのも吉井君？」

「まさか…そのおつとりとした態度…由莉奈か？」

一度目の春…僕は運命的と言える幼なじみとの再会をしたのだった

001（前書き）

「明久ハーレム…そんなの有り得ないだろ！」

琴吹由莉奈……昔の幼なじみで一番幼い頃一緒に遊んでいたその時はまだ僕は馬鹿だったからまあ色々やつてしまつた訳で……

ということはどうでもいい！

「四年ぶりかあ…久しぶりだね吉井く…明久君」

「ああ…琴吹も元氣で何よりだよ」

琴吹は四年前、よその場所へ引っ越しした…だから中学生活…僕にはあまり良い思い出はなかつたと言えよつ

「それにしても…琴吹だいぶ大人びたな」

特に胸や…体型とか…まあそれ以外にもまず美しくなつたと言える…しかし顔は相変わらず可愛い分類に入る。一瞬彼女の赤い…ルビ一色の瞳と視線がぶつかりすぐに逸らす

「そりや…四年も経てばそうなるよ…明久君はあまり変わってないね 特に顔とか」「ちょっと待つんだ琴吹。それはダイレクトで僕を傷つけてしまう言葉の武器だよ！」

「くす…良かった。やっぱりいつもの雰囲気はあるんだね」

「まあ変わったのは一部だけだからな」

二人で並んで歩いているとAクラスが見えてきた…よし無視だ無視しよう

「うわあ…凄いなあつて明久君？見ないの？」

「琴吹…一つ教えておくよ。あまりにも豪華すぎる者を見たら…その後の落胆さに耐えられなくなるぞ」

Aクラスの設備にあまりにも感動していたら…Fクラスを見た時、

絶対帰りたくない。そんなことにならない為にも早く去らないと

「え…？明久君はAクラスじゃないの？」

「琴吹…僕の性格からすればAクラスは無理だろ？」

「あ…そうだねって…そんなことないよ！明久君馬鹿じゃないもん！」

琴吹…嬉しいんだけど最初の額きは何だ？あれか！？実はSですって言いたいのか！？

「残念だけどこれが事実なんだ」

ピラリとさつきの紙を見せ窓を見ながら黄皿の…勉強なんてほとんどしてなかつたから…

「やつたあ！明久君と同じクラスだよ！」

琴吹は思わず飛び上がり抱きついてくる…琴吹から結果を渡してもらい肩にたわわが押しつけられたままゆっくり紙を開いた

琴吹由莉奈 Fクラス

「…まじか」

正直彼女にはAクラスでのびのびとと平和に勉強して欲しかつただけど…ん？

「なあ琴吹…お前つて去年もここ？」

「うん！実はね 去年ようやく帰つてくることができたから」

「！」

「明久君？なんで落ち込んでるの？」

そりや帰つてきたのに連絡もなしで、一年間会えなかつたら誰だつて寂しいでしょ？

なんか僕だけのけものかよ！つて感じでわ

「まあいいや…それより琴吹。早くFクラスに行かないと」

「あつ…！ そうだったね」

久しぶりに見ることができた彼女の笑みに安心を感じ、僕らは自身の教室へと向かつた

「明久君…」

「わかつてゐる」

「「帰るぞ！」（よ）」「

「逃げるな明久」

ガシリと捕まれ動きを失つ…くつ！雄一貴様！

何故こうなったのかは簡単だ

教室のあまりの酷さに落ち込む僕ら

僕が先頭をきつて扉を開ける…

悪友の登場…罵倒を言われ由莉奈がピコハンで叩く

その隙に逃げよしとした捕まつた

「以上だ」

「堂々と言い切るな馬鹿」

「む！明久君は馬鹿じやないよー！」

パコンーと由莉奈が坂本雄一にピコハンで再び叩く

「痛つ…さつきからなにすんだお前…」

「明久君を馬鹿馬鹿言つちや駄目…」

「だつ！わかつた！わかつたから叩くな！」

由莉奈はピコハンを下ろしそうに腰を落とした。まあ今のは雄一が悪いな

「たくつ…明久。そいつは誰だ」

「琴吹由莉奈さ…僕の幼なじみだよ」

『『幼なじみだとおおおおー…』』

周りからは殺氣を漏らした叫び声が響く…由莉奈は怖かったのかきゅっと僕のブレザーを掴んだ

「はは… こりや また危ないクラスに入つたもんだよ
「そこには俺も納得だ」

「雄一」と苦笑しあつてるとガラリと扉が開いた… 況えない顔にコレヨ
レのシャツを着た教師が入つてくる

「すみません… ちょっと通してください」

「海馬！？」

「違います」

一瞬あの… 遊戯王で有名な海馬社長と思つてしまつへりこ声が似て
いた… といつか社長だろ絶対

「皆さん席に着いてください。HRを始めますので」

「あの… 席は」

「1)自由に」

「席すら決まつてないの！？明久君～」

「わかつてゐつて… とりあえずあそこがいいな」

琴吹を連れて奥の方へ座る… 琴吹は風が少ないので僕は後ろだ… 何
？ 何故わざわざ後ろかだつて？

決まつてるじやないか… 琴吹が可愛いからさ

「明久！」

「ん…？…とつ！」

横から声がし、振り返る前に抱きつかれた… ふむ… この匂いは… 由
美か

「ゆ、ゆ由美ちやん何やつてゐのーー」

「あつ由莉奈久しぶり！」

(何故だろ？なんかやばいことになりそうだ)

これは後に完成する明久はーれむの序章に過ぎなかつた

002 (前書き)

「返りて欲しい...」の気持ち

弓野由美…ゲーム仲間として去年から意氣投合。優しく何気ない仕草が可愛い親友だ
まさか…琴吹と知り合ったとはな…

「あつ…離れてよ~由美ちゃん!」
「も、もつけつけただけ」

琴吹は僕に抱きついている由美を引き離そつと引っ張る。
弓野は優しいんだけどちょっと激しい面があるんだよな…
「はは…まあいいじゃないか」
「明久君はそれでいいの?」

「どうこうことだ?」

「え…? だつて…」

「 親友なら抱きつくな」とへりへりおかしくないでしょ?」
「 「え…?」「

あ、あれ?なんで二人は固まつたんだ…?何か悪いこと言つたかな
あ…あ!…そつか

「そんなに言つなら琴吹も抱きついたら?」

「ええ!…わわわ私も?」「どうした?なんなら僕が抱きつくな?

?」「

「あ、あきひ、あき、ああああ明久君とはぐ…?」

琴吹は真つ赤になりながら慌てふためく…何を驚いてるんだ

「明久君…」

「相変わらずじや のお主は」

「…………鈍感」

何?親友のムツツリー や秀吉達まで何呆れてるんだよ ちょっと

待つんだ。鈍感ってなんだ鈍感つて…

「琴吹も」「野もどうしたんだよ？僕は別にいやらしい気持ちなんて思っていないよ？琴吹に関しては久しぶりじゃないか…『趣味は吉井明久を殴ることです！』誰だ！そんな危険で限定的な趣味を持った馬鹿はああ！」

教卓に目線を向けるとポニー テールに縁の瞳が特徴的でツンデレではなくガンデ的な女子…島田美波がいた

「ハロハロ～」

「ぐ…島田！」

ガンデレと言うのは照れ隠しで殴ると言う意味だ…去年からよく关节を外されていたことが懐かしい

「…………島田さんか…」

「どうしたの琴吹」

「なんでもないよっ」

嘘だ…さっきまでピコハンを取り出していただろ。まあ僕の為と言うのは嬉しい限りだが…

とこうかてへへと笑う琴吹はめちゃくちゃ 可愛いい…！

『…………（明久からの依頼か）』

琴吹と「野の写真を2ダース頼んだ

『（ア解）』

さて目的達成だ…後は気長に待つか『趣味は吉井明久君にキスしてもらひことですつ』誰だ！？危なくて可愛い趣味を持つた奴は！

「 …」

島田と同じようにバツと教卓に田線を持つしていくとクリーム色に近く綺麗な癖の無い背中まで伸びた髪に赤い瞳が特徴的な女子がいた
坂本春菜…雄一の妹にして雄一とは真逆でとても優しい人だ…
春菜はここに手を振っている

『 吉井い…』

「う…息苦しい…向こうから凄いプレッシャーが…

「ちなみに明君に手を出した人は…わかつますね?」

『『YES! MY Load!』』

「はは…全く春菜のいたずらにも困つたもんだよ。なあ雄一」「…そうか?俺としてはあいつは本当に前を好いてると思つが…」「ないない…ん?一人共どうしたんだ?」

「う、うん。ちょっとね」

「春菜つてあんなに大胆だつたかなあ…」

「?『明君つ』のわああ!?」

思わず後ずさるが後ろは壁だった…春菜はチャンスとばかりに自身の唇を押しつけようとする…

「 …」

「そのくらいにしておけ春菜』せやつー雄一お兄ちゃん離してよお

『 …』

雄一に引き離されじたばた暴れる妹に雄一は『はあ…』とため息を

深くついた…僕は僕でドキドキする心臓を押さえていた

ムツツリーーはムツツリーーで写真を収め…秀吉は既に教卓の方を向いていた

流石秀吉と言つべきか…全『趣味はお菓子作りにフルートを吹くこと…あと、明久君に『か、かかか可愛いな』って言つても『うつことです…誰だ…?そんな野望を持った奴は!

「…琴吹…か」

あんなに必死で言われると…正直照れるし…胸が熱くなる

『『吉井だと…?』』

そして一気に寿命が縮みそうだ…というかあっちの集団つて…恋人ができるないからと言つ理不尽な考え方から作られたFFF団か!?

「よろしくお願ひします!」

「「ぐふあ…!」」

その場にいた全員が鼻血を吹き出し倒れる…僕は鼻をつまんでとりあえずトントンと首を叩く。琴吹の笑みは危険だな

「『野由美です!好きなことはゲームで…明久君と一緒に遊んでます』

「「また吉井だとあああ…?」」

「お…!野…あまり爆弾発…『諸君…今こそ男の敵を狩るのだああ…』ひ…ぎやあああ…!」

「む…明久君を苛めたら駄目…!」

「ちょっとみんな落ち着いて!」

「野と琴吹によつて止められました

「うう…痛てて」

「大丈夫明久君？」

つるつるした手で手当をしてくれる琴吹…ああ癒やされるぜ

「『めんね』」

「『野が謝る』と『ぢゃない…悪いのは理不尽なあいつらだよ』

「全く馬鹿だな前『雄一お兄ちゃん…』全く馬鹿だなあいつらも

…

ガラリツ

自己紹介が続く中、突然扉が開かれ一人の女子が入ってきた

「あの…遅れてしまません…」

『『え…?』』

その場にいた男子達は口をあんぐりと開けたまま目を見開いた
姫路瑞希…成績優秀、美人、礼儀正しい…まあ男子達の憧れが詰ま
った性格の持ち主だ。だが振り分け試験…姫路はいきなりの体調不
良の為退席するしかなかったのだ。退席すれば今までの点は全て無
くなる。教師に訴えても聞いてもらえず結果、姫路はこの
Fクラスへと強制的に決まったのだった

「姫路さんですね？保健室に行つてたことは聞いています。今、自己紹介を行つてるので姫路さんもお願ひします」

「あ、はい！姫路瑞希です！よろしくお願ひします！」

姫路は礼儀正しくお辞儀をする…緊張しすぎて顔が赤くなってるぞ…

「はい！質問良いですか？」

「あ、はい！何でしょうか？」

「なんで『僕が説明した』」

『そりいえば俺も熱（の問題）でFクラスに』

『ああ。あれは難しかつたよな』

『俺は弟が自動車に跳ねられたから』

『嘘つくな。お前の弟元気だつた？』

『琴吹さんが寝かせてくれなくて』へえ…人の幼なじみに手を出す
とは…馬鹿な奴だ』ぎやあああ

『明久君！嘘だから！大丈夫だから！はわわーそれ以上やつたら頭
から大脑が飛び出しちゃうよ！』

全く馬鹿だらけなクラスだ…なるほどこれがFクラスか

「と、とりあえずよろしくお願ひします！」

姫路は再びお辞儀をした後、トタトタ琴吹と雄二の間の席に座つた
…そしてふうとなでおろしている

「姫」「姫路」

肩雄二「いい！！台詞をかぶせて来やがつて！なんだ！？前々から思
つてたがお前はなんか恨みでもあるのか！？」

「あ、はいなんでしょうか…えつと」

「代表の坂本雄二だ…代表なり名前なり好きに呼んでくれ。それよ
り体調は大丈夫なのか？」

「僕も気になる」

「あつ！私も！」

姫路は僕らを見て驚いた表情をする…おいおいまさか不細工とかじ
やないよな？

「明久君！それに由美ちゃんや由莉奈ちゃんも…」

「ん？明久…お前姫路と知りあいか？」

「ああ…僕と由莉奈は小学校の時からの仲だ。それより姫路大丈夫か？」

「はいっ！お陰様で…あの時はありがとうございます明久君」

「ああ…いいよ。元気になつてなによりだ」

姫路の頭を軽く撫でると恥ずかしそうに姫路は俯いた…ん？何かし

たか？

「自覚ないの明久君？」

「琴吹？…待て！なんだその田は」

琴吹はなんでもないよと軽く笑つてから辺りを見回した

弓野は秀吉達と話している

「明久君～！」

「うわっ…どうした春菜」

春菜はにへへと笑いながらただ抱きつぐだけ…だが、周囲は殺氣だらけだ

『畜生！なんであんなバカに』

『春菜さん…俺に抱きついてくれ～』『琴吹たん！』

気持ち悪い…ただその言葉しか出てこない…

前にいた福原先生が教卓を叩き見事に教卓は肩になつてしまつた
「替えを持ってきます…皆さんは静かに自習をしてください」
先生はすぐに教室から出て行き…僕は座布団から立ち上がり雄一の

元へ

「雄一…ちょっとといいか？」

「ん？ああ別に良いぞ」

明久 side end

琴吹は静かに卓袱台の埃をはらつていた
しかしその顔に元気は無く明久の方を見る
「はは…ちょっと落ち着けって」

明久は笑いながら抱きついている春菜を撫でる…その光景を見て由
莉奈は寂しい気持ちに覆われていた
(…やっぱり春菜ちゃんや由美ちゃんは明久君が…)
切ない気持ちを抑え由莉奈は卓袱台にノートを広げたのだった

〇〇三（前書き）

「強くはない。…だけじゃんきや いけない それが運命だから」

「 今日僕が呪わるならあなたは…何をする?」

「どうした話しつて？」

「うん… 実はね」

雄一と明久が帰ってきた後由莉奈はしばらく俯いていたがすぐに明久へ声をかける

先生がまだ来ていないと言つことで明久は相談に乗ることにし廊下へと出た

由莉奈はさつきのように軽く笑いながら明久を見る

「あのね… 明久君に相談しても無理かもしれないけど…」

由莉奈はその後しばらく黙り込みゅっくり明久を見る。明久は待つているかのように静かな雰囲気だった

あのね… 私… 今日で死んじゃうんだ

少女の言葉は静かで… 冷えていた

明久 side

「… 死ぬ？」

「うん…」

最初聞いた時は嘘だと思っていた… いや思ひたかった
でも琴吹の顔が嘘でないと物語つている

「何があつたんだ?」

「………… 中学生の頃… 『ある悪魔にそう言われたの』」

琴吹は続け喋る…その単語は僕の胸を貫くよつだつた

「 その悪魔は妖魔つて言つてた」

「 …！」

胸がズキズキする…あつて欲しくなかつたことが起きたのだ

「 …その妖魔は何て言つてたの？」

「 お前はもう生きられない…俺が取り憑いたからにはあと一年までの命だつて」

「それが今日…」

「ねえ明久君！私やつぱり死んじゃうの？」

由莉奈の顔はとても苦しそうだつた…相談もできず、ずっと恐怖に耐えてきたようなそんな顔をしていた。それを見るたび胸がズキズキする

「落ちついて聞いてね由莉奈…それが普通の幽靈なら解決策はいくらでもあつた…でも…由莉奈が言つてた妖魔なら解決策は無いかもしない…」

思わず素の口調が出でているけど気にしない…！だつて親友の命の危機だから！

「 …死にたくない…死にたくない…いよ…つ…嫌！嫌！しにたくない

…！助けて…明久君！明久君！明久君…」

ガタガタと震え混乱してしまつてゐる馴染みを抱きしめ優しく撫でる

「 大丈夫！大丈夫だから！」

「 …う…うわああん！…いやだ…よお！じにだくないよ…」いつもおつとりしている彼女は…そんな面影もなくひたすら泣いている…

僕は必死に抱きしめ大丈夫と言い聞かせた

琴吹は中学生の頃…胸が大きいことで苛められていたらしい…

さらに中学生の頃は思春期だ

欲情した男子と教師により琴吹は犯されかけた…

琴吹は助けを求めたが相手が間違っていた

妖魔だ…彼女は悪魔の姿をした妖魔と出会つたんだ…妖魔は助けるかわりにお前の寿命を貰つと琴吹に告げた

琴吹は考える猶予もなく頷きそして…彼女の命は今日までとなつてしまつたんだ

「何で…私…何の為に生まれてきたの…ねえ明久君…」

「琴吹…」

静かに琴吹を抱きしめながらぐつと拳を握る…

(どうして僕は離してしまつたんだ…彼女は転校しても何もなかつたのに)

しばらくこうしているとガラリと扉が開きクラスメイト達がいた…

クラスメイト達は驚いていたり嫉妬をしていたりしていた

「雄二…?どうしたの…?どうしたんだ?」

「ああ…試験召喚戦争でお前にについて紹介しておこうと思つたがいなかつたからな」

…いつの間にそんな話を…いや…聞こえなかつただけかも知れない

「吉井！何琴吹を泣かしてるのよ！」

「島田や…島田！?違う！これは…」

島田の言葉でスイッチが入つたかのように次々とクラスメイト達が業を煮やす

『吉井！我らが女神を泣かすとは許さん！』

『スクランプにしてやる！』

『いーや！紐無しバンジーだ！』

『違う！釘刺しだ！』

「死刑内容怖すぎるぞ！？」

く…そ。かくなる上は…！」

「逃げるや^琴吹！」

「ひぐ…え…？あぎひびぐん！？」

琴吹の腕を掴みすぐに逃げ出す…後ろでは雄一の悲鳴やら美波の怒鳴りやら…クラスメイトの死の歌やらが響く

「…よし…」

「ひやう…」

琴吹を引きずるよつた形で走る…仕方ないじゃねえか…急いでるんだからよ…

「ほつ…」

「きやうつ…」

窓から飛び降り…すぐに雨戸の筒を掴み滑り降りる。そして素早く新校舎側へと走り空き教室に飛び込んだ

「…だつ…」

「にやわ！」

飛び込んだ拍子に思い切り転び琴吹を押し倒す形で盛大に倒れた

「痛てて…大丈夫か^琴吹？」

真下にいる琴吹に声をかけると鎖骨あたりまで真っ赤になりながら強く頷いた

『くそ！吉井めどこに消えた！』

『アキ！すぐに楽にするから出て来て？』

『……裏切り者には死だけだ明久』

く…そ…向ひのことはばつなに頭に凄く響く…

「明久君大丈夫？」

「大丈夫…」

琴吹はまだ赤い顔のまま起き上がり辺りを見回した…

「ここって」

「そうさ…保健室だ」

「…？」

「今日は先生いないな…まあいいか」

「明久君！？何をするきれしゅか！？」

琴吹さん…琴吹は真っ赤な顔になりながらしどりもどりあたふたして…どうしたんだろ？

「まついいや。時間がないし…始めるか

「…ふえ！？」

のつそりと立ち上がり道具がしまってある引き出しを開ける

「あ…明久君？よ、良くないよそんなこと…？」

「そもそも言つてられないんだ琴吹さん…今日は先生休みらしいからさ。チャンスでもあるけど」

えつといつもどこにしまってたかなあ？…あ…違うな

「せ、先生がいない！？あ、明久君！私その…いい体してないよ！」
琴吹さんは真っ赤になりながらきつぱり告げた…その言葉に流石にツッコミを入れるしかない！

「琴吹さ…琴吹！それじゃあまるで僕は少女の裸が好きな奴になってしまうんだけど！？」

「え…？だつて明久君…わ、わ私のかかか体が田舎でじや…」

「はああ！？ばばば馬鹿言うな！」

「うつ…首まで熱い…く…消えろ邪念…琴吹さんの裸を妄想するなああ…」

で、でも琴吹さん…久しぶりにあつたと思つたら凄いスタイルが良くてグラマス」…

「明久君？」

「あああ！なんでもない…！それより始めよつか」

「…一応聞くけど何を…」

「ん？ああ…琴吹さん…自分は何の為生まれてきたって言つてたよな？」

「う…ん」

俯く琴吹の頭にポンと手を乗せてにっこり笑う…

「少なくとも…僕は琴吹が生まれてきたおかげでいろいろと助かって…これからを大事に生きればいいんだよ」

「でも…私の命は今日で」

「馬鹿言つな。そんなことさせないぞ絶対に…いや…僕と再会できることでその運命は今日で終わりだ」

「え…？」

驚く琴吹を優しく撫でてまた微笑む…

後に僕は琴吹と再会できたのは何かの運命だったのかもしれないとたびたび感じるのだった

引き出しをしばらくあさつてるとようやく探してた物を発見した
ふつ…あいつこんな所にしまってたのかよ…

「よし…これでようやく実行できる」

上下に振つてたら琴吹がまじまじとそれを見つめていた

「明久君…それ何？」

「これは…妖魔専用のアイテムさ」

まるで獣の爪をイメージしたかのような青い物を振りながら琴吹に近づいていく

「明久君妖魔知ってるの？」

「まあな…何度か相手したし」

軽く笑いながら琴吹の隣に座る…「」で何故僕がこんなに詳しいか簡単に説明しよう

僕はある時一匹蒼い狼と契約をした…理由は説明できないが僕はそいつを選ばれたらしい

契約した者に待ち受けるは妖魔との戦い

そして…保健室の先生である佐野と出会い僕は力を佐野に預けているそれがこの蒼き狼の爪…ウルフブラッドだ。こいつは人に取り憑いた妖魔を引き離すことができる。けど僕の力の一部である為普段は佐野に預けていた

実際にわかりずらい話して申し訳ない

「ほえ…凄いんだね明久君は」

「いや…嬉しい力でもない。どちらかと言えばいらない」

琴吹は首を傾げるが僕はまた軽く笑う

あまり好きではないんだ。あの出会いから僕は変わってしまったのだから

「よし時間がないから早く始めるぞ…」

首や足を軽くストレッチした後、琴吹のスカートを掴む

「え！？あ、あの明久君？」

「時間がないって言つてるだろ」

琴吹はわたわたしながらスカートを掴んでいた僕の腕を握る……作業
ができないんだが

「あああ明久君！駄目だよ！セクハラだよ！」

「……ちよつとまで！酷い誤解を受けてるんだけど！？」

「じゃあなんでスカート掴むの！？」

あつ……なるほど……確かにつかまれて反応しない女子はいないな

「……理由はちゃんとある……一つは妖魔の刻印が足の横にあるからだ
……いくら力を預けてるって言つても少しは残つてるからな……そう言
つたことはわかるんだ」

「じゃあ……一つ目は？」

「ただ純粋に欲望のままに琴吹……お前のパンツが見たい」

パカアアン！

「何を言つてるの明久君のエッチ！」

「すまない半分冗談だ」

「発目が来たのは言つまでもなかつた……

「……とにかくやつぱり捲らなきや駄目？」

「ああ……ついでにパ…すみません冗談ですかー…ピコハン構えない
で！」

「うう…」

（）（）（）

「電話か…雄一だな。もしもし」

『 明久！何処をほつつき歩いてんだ！』

「今大事な用事をしてるんだよ…」

『 琴吹とか？試験召喚戦争始まつちまつぞ？お前一人何女子と遊ん

「試験召喚戦争より命の方が大事だろ！そんなことしてる場合かよ

！』　　おい明久…』

無理やり通話を切り携帯をベッドに投げ捨てる…

命を何だと思つてんだ

「明久君…」

「悪い…始めようか」

「う、うん」

琴吹は赤くなりながらスカートを捲ろうと手をかけるが震えている
それを見たやいな、僕は琴吹のスカートを掴み側だけを下着が見え
ないよう捲くる

そこには刻印があり…琴吹が何か言つ前に素早く狼の爪を軽く押し
付けた

「よし…完了」

ゆっくり離しスカートも元に戻し爪を見る

「え？もう終わつたの？」

「何？本当に見て欲しかつたのか？」

からかうように聞いてみたが琴吹はポカーンとしている

「狼の爪はさ強力で…どんな妖魔でも引き離せるんだ」

「へえ…凄いんだね」

「でも最後は己の手で始末しなきやならないけどな」

そう言つてから爪を取り出し空中にひつかくと途端に周りが白くな
り物は黄色やピンク色になつた

「ここには異空間だ…さつきの場所と違つて妖魔専用の教室かな」僕は辺りを見回す琴吹に前にいる奴に指差し教える

「何あれ？」

「あいつが琴吹に取り憑いた妖魔…『黒鹿』さ…ほら人のように見えて角とかあるでしょ」

「あ…本当だ」

「黒鹿は取り憑いた者の寿命を奪い…それを養分とする。勿論邪魔者は許さないプライド高い上レベルの奴さ」

「そんな…」

「まあ今から始末するし…お前には被害ないから大丈夫。」

前に進もうとしたら琴吹に引っ張られた…その顔は凄く悲しい顔だ
「襲つてくるんでしょう？危ないよ…明久君が死ぬくらいなら私が」「はあ」

少しため息をついてから軽く琴吹のスカートを捲つた

「

「ひやああ！」

「馬一鹿。琴吹のパンツをみらずして死ねるかつての」

「ふええ？」

混乱している琴吹に軽く笑いゆつくりと前に進む
それに僕は必ず死ねない力があるから

「へつ……」

歩きながら爪を腕に突き刺し体内に預けていた力を送る…ぐう頭が痛いのは毎度のことだ

「…ふう」

爪を取り琴吹に投げておく…「おーやつぱりこの力凄いな
今の僕は瞳が赤くなっている…これが本来の力を使う時の状態だ…
あの蒼い狼の瞳を受け継いでいる

「よしつ… やるか」

『…………オオカミ?』

ズんずんと黒鹿の近くまで歩いていき気づいた瞬時に見えない速さで蹴りを腹にいれる

「おらああ！」

『ガツ！ガハ！』

バキヤツと碎ける音が響いき黒鹿はいきなりの不意打ちに見事盛大に転げ回った。すぐに黒鹿へ向けて走り出す
そして大きく跳躍し追撃を鳩尾に打ちつけた

『ガフアアア！』

「…っしゃあ！」続けて放つた拳を黒鹿は素早く避け机が碎ける。
素早く後ろを振り返り黒鹿のアッパーを避けるが右拳を突き落とされた

「ぐ！」

突出に左腕で防御に入つたがきしむように重く腕に嫌な音が響いた

ベキバキュ

「がああ！」

くつ……左腕の骨を砕かれた……！

蒼狼の力は肉体強化と死なない体だ……普通の人間が妖魔と互角に渡り合えるほど肉体強化されるが妖魔を倒せるかは契約者の腕次第だ狼にはこれよりもはるかに強い本来の力があり……その力は佐野先生自身が持ち歩いている

『シネー！』

「ぐ……！」

考える暇なく黒鹿の拳が振り下ろされ素早く避ける。注意すべきはあのパワーだ

なんせあれだけで左腕がやられたくらいだ

『フン！』

「くそ！あつ……ぐうう」

次に放たれた右ジャブを避けられず回復した左腕でガードする……が再び嫌な音が響き歯をくいしばる

「このやろー！」

『ガアー！』

だらんと左腕は下がつてしまふが素早く相手の膝、腹、首にザクッと蹴りを放つた。黒鹿は叫びながらやられた箇所から黒い血を流す。僕は荒い息をしながら奴を見る

(効いてるーこの力は上レベルにでも通用す…)

「足…?だと……ぐが!」

黒鹿は蹴りを顔に叩きつけそのまま横へと僕を投げ飛ばした。その一撃で首をやられたが…すぐに回復する。だが、黒鹿がすぐに頭を叩きつける

「がはつ!」頭が切れて血が流れ田を伝つ…口からは耐えきれず赤い液体が飛び散る…デタラメすぎるぞ…あれ

『オオカミイイ!』

「がはつ…」

黒鹿は襟を掴み殴りかかる…僕も負けじと勢いよく黒鹿の顔を殴つた

41

『キュー・メキメキ

「…あああつ…つ」

『ヌガアアアツ!』

鈍い音が聞こえお互いに吹き飛び机に激突する…どうやら顔の骨を碎かれたらし…

「…」

『キサマア!』

ブレザーが血の色で反転している…ネクタイはいかにも真っ赤だ

「つ!」

『ユルサン!ユルサン!コルサン!』

「……ああ

追撃され休む暇なく腹に肩に激しい痛みばかりが伝わってくる…た
まに吐血をし再び殴られ殴り返す

戦いが下手な僕にとっては続けて戦うのは無理だ…

「く……！」

『ガアアアア！』

ガシリと殴った腕を掴まれ桁外れな力で握りつぶされる…叫ぶ暇もなく首を掴まれグシャリとリンゴを素手で握りつぶすように僕の喉はいかれてしまった

「…………あ……が」

回復はするとしても苦しい…まるで拷問のよつだ

『ギアアアア！』

「…………つ！」

後ろから蹴りを放たれ赤い血が飛び散りながら壁に衝突する

状況は非常に不利であった

004（前書き）

連続更新

「私ね……大切な人がいるの…凄く優しくて凄く馬鹿で…凄く格好良くて大切な大切な幼なじみ」

「ぐぬああ！」

『『ゲブグボ！』』

明久の一撃が黒鹿の腹に激突し黒鹿は吐血するがすぐに血だらけの明久の顔を掴み思い切り椅子に叩きつける

「…がふつ！」

『『ヌアアアア！』』

「ぐぼつ！」

立ち上がりろうとした明久に黒鹿が容赦なく肘を鳩尾に叩きつけ明久は盛大に吐いた

「…はー…はー」

必死に息をしながら明久は黒鹿を見る…黒鹿は折れた両角を抑えながら苦しんでいる

(やつぱり…勝てないか。それに思つてた以上だ…あの黒鹿は防ぎきれないほどパワーが桁外れな上に早い)

『『ギイイ！』』

「がつはつ！」

腹を思い切り殴られ吐血をしながら震える手で黒鹿を掴む黒鹿はそれを払い容赦なく明久を叩きつける

「ぐ…ああ！」

黒鹿は容赦なく明久の首を掴み再び喉をつぶした……明久は悲鳴を上げたが全く声が出ない

回復能力は怪我を負えばすぐに元通りに戻す力があるが、強力な力故にだんだんと回復が遅くなつていく

さらに疲労とダメージが蓄積すれば回復能力が追いつかなくなつてしまふ場合があるのだ

ズビシユ！

「ぐああ」

黒鹿は怒りまかせのデタラメな手刀で明久の腹を切り裂き腹に穴を開けた

明久は胃液と混じり血大量に吐きだしそのまま黒鹿に投げ飛ばされた

「明久君！ 明久君 ！」

由莉奈は長い橙色の髪を揺らしながら明久の元へ走っていく
そして明久を抱き起こし必死に呼びかける

「…………か……」

「喋らないでいいよ明久君！ もういいよ！」 明久は琴吹をどけて腹
に穴が空いてるというのにゆっくりと起き上がり黒鹿を見る

『ジャマヲスルナオオカミイイ！』

「そもそも…いかないさ…だつて…あいつに…まだ…ンツ見
せてもらつていな…い…しさ」

「明久君……」

明久はへらへら笑いながらかすれた声で必死に喋る。そして赤い瞳
で黒鹿を睨みつける… その瞳はボロボロでも腹に穴が空いても闘士
を失つていない

『ナラキエロ！ オマエハジャマダアア！』

「は…は…」

明久は肩で必死に息しながら涙を流しながら明久を見つめる由莉奈
に笑いかけた

「…………終わつたらキ…ね」

「…こんな時に冗談はやめてよ…」

明久はニカリと笑いながら口から流れる血を静かに拭う… 黒鹿は奇
声を上げながら突撃をしてくる

「…………つおおおー！」

明久は腹の底から声を出し拳をゆっくり握りしめる。瞳は鋭くなり獸のようだ

「ガルアアアア！」

『ガツ！』

力を振り絞り地面に足を食い込ませ力の限り拳を黒鹿に叩きつけ腹を貫通させた

その姿はまるで獲物を噛み碎く狼だった

「ガルア！」

さらに赤い瞳が獲物を捕らえれるように右拳を黒鹿の顔に叩きつけ顔を貫通させた

『ガア！アア！』

「はあ……はあ……」

黒鹿は顔と体から黒い液体をぶちまけながら奇声と悲鳴を上げながら盛大に倒れた。

明久は辛くも勝利し徐々に回復している腹から力を抜いた

明久 side

倒された黒鹿から何かが抜けるよう出て行った…

「あれは…」

「ぜえ…妖魔だよ…死んだから離れて行つたんだ。でも驚いたな…まさか妖魔が取り憑いてたのは白鹿だったなんてさ…」

僕はげほげほと血を吐き出しながら倒れている美しい白い鹿を眺める…ようやく声が戻った

琴吹は白鹿を見て驚くように口を押さえた…そして徐々に瞳から涙がこぼれる

「いけよ…お前の神様だろ?」

『琴吹は…ゆつくり近づき抱きしめた

琴吹は気づいたのだ…かつて自分を守ってくれた存在に…白い鹿に

だが…琴吹はあの事件のせいで白鹿を見放したのだ…守ってくれない…寂しい…そんな気持ちが白鹿を弱らせ結果的に妖魔に取り憑かれ黒鹿になってしまった

「『めんなさい…私…あなたを…』『めんなさい…』『めんなさい…』『白雪…』…！」

地上の神様…白鹿『白雪』は優しく琴吹を舐めた…白鹿は雌だとても優しい神様であり、彼女をずっと琴吹を守つていくと誓つた。それは今も変わらない

だが琴吹は謝りたかった…いつも自分を守ってくれる存在を否定し酷いことをしたのだから

「『めんなさい…』『めんなさい…』

『キニシナイデ…アナタノセイジヤナイ。ワタシハアナタヲコレカラゼッタイマモル…マモツテミセルカラ』

「つうん…私が弱いのが駄目だったの…私が白雪に頼つてばかりだったから」

静かに一人を見守りながら塞がつしていくもまだ流れる血を拭う

と、傍らに蒼い狼…天空の神『空牙』がいた…

『ヨカツタナアキヒサー。オレモコウマヲクエタ…オマエモアイツヲタスケタ』

「ああ…これでひとまずは安心できるけど、神様相手に戦うのなんてやっぱりムチャクチャだつたよな…僕はまだまだ弱いってことか」

『イヤ、オマエハママダマダチカラノアリカタヲワカツテイナイダケダ。オマエハコレカラシヨクナレル』

空牙は赤い瞳で僕を見つめてくる…「…」いつは僕が何があつても常に味方でいてくれる…優しくて馬鹿な神様だ

「すまないな……じゃあな空牙」

空牙は優しい表情をし、それを軽く見た後静かに爪で再び中をひっかくと異空間は消え僕と琴吹だけになつっていた

「え？白雪…！白雪は」

「彼女なら…そこにいるさ」

琴吹は僕の目線を追い静かにそれを見つめる…鹿の白い角が真珠に挟まれたネックレスが太陽で光っている

「……絶対手放さないからね」

優しくネックレスを抱く中、引き出しを開けて爪をしまつ…これが力を使う時のルールだ

「……目的達成だな」

「ありがとう明久君」

「いや…僕のおかげじゃない…あの力のおかげだ」

「ううん…私は明久君だと思ってるよ?」

「そうか…」

しばらくお互いもどかしいように朱を散らしていると琴吹はこっちに静かに歩いてきた後…顔を近づけた…

「本当にありがとう明久君」

チュウッと柔らかい音が頬に響き…視界がゆらぐ…

琴吹は意地悪そうに笑っていた…何が起きた…なんだ?

「うわ…!」

突如ブワアと風が吹き琴吹のスカートが舞い上がった…

「…………あ」

「ほえ…?」

舞い上がった琴吹のスカートの中に思わず視線がいく僕と首を傾げる琴吹…目に映つたのはライトピンクの紐パ…

パアアアンと頬に激しい痛みが走り意識が刈り取られた

「…最低…! 明久君の変態!」

これはこれでまんざらでもない…とにかく僕は始業式始まりに幼なじみの下着を挿むことができたのだった

「痛たた…さて僕らも戻らなこと」すぐじ田覚めまだ赤くなつて、
る琴吹に声をかけると慌てるよつに戻つてきた

「坂本君怒つてないかな?」

「罵倒はするだらうけどあいつは素直じやないからな

「明久君が言えるの?」

「ん? 何か言った?」

「う…ううん! なんでもないよ!」踵を返しすぐに保健室から出て
行く…サボつてしまつたからな…早く戻らないと

『よし…平賀を打て!』

『『覚悟おおー!』』『Fクラスの力見せてやるつづー!』

「なんだこれ」「明久よ! 何処へ行つておつた」

「ちょっとな…それより秀吉…何が起きたんだ?」「秀吉は頷いてから一人を指差した…それを見て僕と琴吹は固まつた

』野と春菜がDクラスの生徒達を無双していたからだ…いやいやい
くらなんでも凄すぎるぞ…?

「あ！明久君！待つてすぐに終わるから…」

「時間はかけないからね明久君！」

「あ…ああ」

何だ？一人から凄い気迫が感じるんだが… 一体何があいつらをここまで動かしてんのだ？

坂本春菜

Fクラス

世界史

250

弓野由美

Fクラス

世界史

280

(（勝つたら…明久君に誉めてもうれる…））

「二人共凄いなあ…」

「ん？その言い方だと琴吹は勉強苦手か？」

「どちらかと言えば得意だけど…ただ試験召喚獣の操作が苦手かなあ

「…へえ…てつきりお前は勉強が駄目だと思つたけどな

「酷いよ明久君！そう言う明久君はどうなの？」

「社会的科目しか自信がない」

ズバリと言い放つと琴吹はへえと何故か哀れむような目で見つめてきた…

「『人に散々言つておきながらお前はそんなのしかできないのかよ。馬鹿だなあ』って言いたいような目で見るなあ！」

『勝者Fクラス！』

「い、いつの間に？あ…姫路が討ち取ったのか…平賀に流石に同情しちまうよ

この日、Fクラスの生徒から喜びとラブコールと悲鳴の声が絶えなかつた

Dクラスに勝利し、僕らは明日に向けて下校していく……まだ明るい
ので残っている奴やラブコールを送る馬鹿がいた
そんな中…僕は美波から関節技を受けていたのだった

「…………でー！美波！何するんだー！これ以上やつたら僕はゴム人間に
なってしまうんだぜ？」

「黙りなさい！あんた今まで何処へ行つてたのよー！」
「ぐ…おお。待て！多分お前は酷く誤解してるぞー！？」

ぐぐぐと締まる関節… まず言いたい… 一冗談にならないほど痛いんだがああ！？

「ガンデレが！ 痛いんだよ！」

「何よ！？ 吉井の癖に生意氣だ」と同じようなこと言つてんじゃねえ！

… ぐが… ドラえもんに謝れ！

くそー絶対こいつをモテないランキング一位にしてやるー。

ベキコン！ボキ！

「ああああああああああ！」

美波は満足したかのように去つていへへへへ…いつもいつも…でもあいつも友達だから… 手が出せない… いや… 女子だからか「痛くて… はあ…」

いつの間にか外された関節は元通りとなつてこぬ… いわこの面では役に立つなこの力

「明久君~」

「なつ… つお」

立ち上がりうとした瞬間素早く誰かに押し倒された… いやこの胸からすれば雄一の妹… 春菜しかいない

「明久君！ 私の活躍見てくれた？」

「ああ… 憎かつたぞ」

「それほどでも~」

「はいはい調子に乗るな」

春菜の頭を軽く叩きすぐにはける… 理由は簡単だ… 「野が凄く誤解したような顔をしていたからだ

「あのな」野！ 別に僕は春菜を犯そうとしてないからな？」

「本当?」

「やつぱりそう思つてたのかよ!? 勿論本当だ!当たり前だろ!」

「そつなんだ……そつ……私で良ければ相手に……」

「ん? 何赤くなつてんだよ?」

その言葉に春菜までも固まり飽きられた視線を送られる…しかも周りから。『いいつ馬鹿だ』と言いたいように

「なんだよ? みんなどうしたんだ!?!?」

「やつぱり自覚ないか」

「明久君だからね」

「はああ?」

みんなから罵倒されそつぽを向いていると会話をしている姫路と琴吹が目に入った

『ゆりちゃんは行かないんですか?』

『みずちゃん…私はいいよ…明久君はやつぱりモテるから』

『ゆりちゃん…近づいてみないとわからないことだつて沢山ありますよ?』

『うん。でも…あの一人は明久君と凄く仲がいいし…私じゃ不釣り

合いだよ…』

『ゆりちゃん…』

「おい琴吹…」

「それじゃあ私部活あるからー。」

「あ…………」

琴吹は姫路と話してからすぐに教室から出て行つた…なんだよあれ

「姫路。あいつと何を話してたんだ?」

「乙女の内緒話です それより明久君。追わなくていいんですか?」

「何がだ…」

「話しがあるんですね？」のままだと明日になるまで念えませんよ~。」

「

「あ~…だいぶ練習してたから遅くなっちゃった…」

「ようやく終わつたか」

「ごめんね…大会が近いから…って明久君…?…はわあ…」

琴吹は僕に驚いたのかフルートを思わず落としそうになり慌てていた。まあ無理もないさ…時刻は17時…外は夕焼け空で教室は僕しかいない

「みんなと帰つたんじゃないの?」

「ナンセンス…琴吹がいなのにそんなこと僕がする訳ないだろ?」

「え…!?

「…久しぶりに会えたからちょっとお話ししようかと思つたしな

「ああーそうなんだ」

あれ?何故か琴吹の表情が暗い気がするんだけど…何故?

「と、とりあえず帰る?」

「ああ……やつだな」

夕焼け空の下…僕らはちょっと買い物してから帰ることにした。しかし奢らされるのは慣れてるがまさか夕食の材料を買わされるとは…

「ねえ……明久君」

「何だ?」

琴吹は両手で僕と自分の鞄を持ちながら少しモジモジしている。とりあえず変なことを口走つたらこの買い物袋で呪いつ

「私…可愛くなつたかな?」

「…………」

黙り込んでしまう。答えはわかっているが口走つていいかわからないからだ…。ただ…本当に僕の幼なじみは変わってしまった

「…………琴吹。はつきり言わせてもらえばお前は魅力がなくなつてる」

「え…………?」

「…………昔のお前なら包み隠さず何でも言つてた。だけど今のお前を見ていると何故だが苦しいんだ」

「…………」

夕焼け空を眺めながらポツリポツリ呟く…琴吹は下を向いたままだ

「…………わからないんだもん」

「は…?」

「明久君…私を異性として見てくれてるかわからない…明久君に可愛く見られたかつたから髪だつて染めた。少しほ遠慮がちなら明久君に可愛く見られると思ってた…でも…でも…」

「…………琴吹?」

「ただ明久君に可愛くなつたつて言つても聞いたかつただけだよ…」
琴吹は捕らえるような赤い瞳でじつと見つめる…正直凄く顔が熱い

「…………胸だつて…大きくないけど」

「琴吹？お、おい」

「…………触つてみればわかるよ?」

いつもと違う琴吹に圧され掴まれた手が彼女の胸へと運ばれていく…

「…………ああ」

ムードンと制服からでも伝わってくる柔らかい感触…それは春菜とはまた違つ…

「…………んうつ！」

「…………つ！」

その柔らかさに手のひらが反応しギュッと強めに握ると彼女から聞いたことのない甘い声が耳に響いた

「…………つわあ！」

「ひやあん！」

我に返り鎖骨まで真っ赤になる…驚いた拍子に更に強く握ってしまい琴吹はピクリと動いた。…………その声は頭にまで響きよつやく足が後ろに下がつた

「…………（琴吹の胸をも、揉んでしまつた…）」

頭を横に振つてもあの瞬間を思い出しちまつた…そうだ…とこりより思つ出してしまつた

「…………」

「はつ…悪い琴吹…つい…」

「…………明久君のエッチ」

罵倒した彼女の顔は…昔のように固くなく朱を散らしながらヒヒ笑つっていた。その表情に思わず固まつてしまつ

「……………明久君もう一度聞いていいかな？」

「ああ…何だ？」

「私…可愛くなつたかな？」

琴吹は夕焼け空を見ながらふと呟いた。わかってる…今のお前を見たら間違ひなく言える

「ああ…外見さえ戻せば凄く可愛いよ…………」

「…………じゃあ私からも一ついいかな？」

「何だ？」

琴吹は前へダンツと飛び見上げるような…上目遣いのような姿勢で朱を散らしながらにつこり微笑む

「私ね……大切な人がいるの…凄く優しくて凄く馬鹿で…凄く格好良くて大切な大切な幼なじみ」

「…………つ！」

彼女の言葉に頬が緩み朱を散らしながら彼女をまじまじと見つめた

彼女は優しく笑い…天使のような表情をしていた

第一章…みやコシ（前書き）

ある日、僕は究極のデジ娘と出合った…彼女のデジは鷺のよつに素早く飛ぶようだった

第一章・みさワシ

この物語を読んで……あつ……明久弱くね?と思つた人に告げる……

気のせいだ

確かに前の章でズタズタにされボコボコにされ拳げ句の果てに腹に穴を空けられたが結果的には勝利した。何故神と戦わないといけなかつた僕が聞きたい

何はともあれ僕は今生きている。それだけで十分じゃないか。だが別の意味で君達に伝えたい……

僕は弱いのだと

「何故買えないんだ!早く並んでいるのにい

ー!ゲームウウウ

!」

・鶯と僕の休田とBクラス

「……………」

最悪だ……人生はなんて卑劣な罠を仕掛けるんだ。一生懸命早起きして隣町まで行き朝早くから並んだのに新作のゲームは僕から逃げていく。諦めきれない僕は重い足を引きずりながら違う店へと向かうことになった

「でも、まあ、隣の街なのにこうも違つなんてな……なんだか別の県に来たみたいだ」

そんな僕の格好はジーンズにパークーと言つたいたつて普通の格好だ。そう言えばここから文月学園に来る奴らもいるんだよな……と思つていると怪しい影が見える

「…………何故だろう。凄く頭が痛い」

これは見ないフリがいいのかな?だけどあんな目立つような場所で撮影しているのを見ると流石に……同じ場所に住む奴としては止めておきたい

「何してるんだムツツリーーー?」

「…………(ブンブン)」

「顔を振らなくともわかるから……否定されてもその仕草からムツツリーーーだつてわかるから」

「…………そんな事実はない」

「事実つて……。何してるんだ?」

「イメージトレーニング」

ムツツリーーーはきつぱりと言つがイメージトレーニングでカメラを使う必要あるか?

「…………明久はどうしてここに?..?」

「ん?ああ、ゲームだよ……こちら辺しか発売しない限定者を」

「…………ちなみにジャンルは?」

「Hロ…ギャルゲーを」

「手に入れたら貸してほしい!」

やはりお前はムツツリーーーだ。とりあえず僕は前に頼んだ写真をタダという条件で了解した。絶対手に入れないと駄目だ

「…………どうぐださ　　い!」

「ん?　『ふつ!』

「 きやう！」

背中に柔らかい感触と体が吹き飛びそうな感触が伝わり僕とぶつかつてきた奴は盛大に吹き飛んだ。僕はなんとか着地したが隣ではバシャアーンと盛大に川へ落ち水が飛び散る

「大丈夫 」

「 痛たた…またやつちやいました」

助け起こそうと近寄った時…鼻が熱くなる。彼女は川の水を浴び、さらに季節にちょうど良い薄手の物だった為…透けている。おかげで彼女の下着はくつきりとあらわになり、おまけにスカートまで捲れてショーツが見えている

「あ…ああ」

「 あつー」めんなさい！あたしうつかりしてたもので

「いや…僕こ…その、色々とすまない」

「はにゃ？」

僕は彼女を川から引っ張り出しすぐに自分のパークーを着せた

「あ、ありがとう」やっこます

「いや…いいわ」

「 …でも、折角のパークーを濡らす訳には行きませんよね」

彼女はそう言いつとパークーを脱ぎ…服を脱ぎだし…つてあおおおい

！？

「 ちょっと待て！何サラリと脱いどしてんだ！」

「 …でもパークーが濡れちゃいますので…」

「 いい！それ防水タイプだから！」

「 大丈夫です。どんなことがあってもあなたに迷惑はかけませんので」

彼女はにっこり笑うと再び脱ぎだし始めた…いやいやあなたの行為事態迷…！？

「どうかしましたか？」

「あ…ついや…」

「くす…大丈夫ですよ。別に下着を見られたくらいで怒りませんから」

「いや…でも僕男だから…」

「…？ あたしから見てあなたは大丈夫だと感じますが？」

（初対面の女の子から早速貴様はヘタレだ発言！？）

「あつ…スカートも濡れちゃつてます」

「…（それだけは止めないとやばい！）」

少女は立ち上がりスカートに手をかけようとするが何故だが手が滑つたらしく…勢い余つて倒れてきた

「 きやー」

「うふ！」

見事に下敷きになつてしまい…顔にはダイレクトに布の感触とじくらいの柔らかさが…

「あつ…めんなさい！」

「う…なんだこれ？」

彼女はまさかドジッ娘か！？あのぶつかってきたこといい、川といい、これといい…。と、とにかくこの感触をいい加減離さないと

「よつと…「ふああん！？」ぬああ！？」

「あ、あの流石にそれは／＼」

少女はゆっくり息をしながら僕にそう言つてくる。無理もない…彼女のたわわは僕が掴んでいるのだから…なんてことだ！琴吹以外の娘の胸を揉んでしまうなんて…

「万死に値する！」

「きやああー何やつてるんですか！？」

少女をどけてナイフを首に持つてくる。ふつふつふ…あの力がない

今、僕は死ぬことができる…そりばだ明久よ…

「駄目です！ キャー！」

「ぬぐわあ！！」

再び彼女のスキルが発動し見事なまでに押し倒された。あ、凄くいい匂いが…

「……自殺なんて絶対駄目です…」

「わ、わかった。わかつたからどいてくれ…じゃなきゃ理性が壊れそうだ」

「あ！すみません！」

彼女は素早くどいてパークーを着る…。はあ…とりあえず彼女が急いでいた原因を聞く必要がありそうだ

001 (前書き)

「彼女はHロゲーのヒロインにふれわしこかもしけな
あ
あやああ

例えば真っ直ぐな道があるとする。僕らは何もなく普通に歩く。
普通だ。それが当たり前のだが、彼女は違う。
彼女はどこかで必ず転ぶ。しかも男子達が憧れるようなことばかり
を繰り出す天然ドジッ娘。西山美沙は普通以下常識以上だ。
彼女の趣味は音楽鑑賞や友達作りと言った実に女の子らしい趣味を
持っている。だが

彼女は妖魔に取り憑かれ。当たり前のことすら失敗する

「で、……つまり西山は文丘学園生徒。さらには一年Bクラスか……」

隣街は複雑だ。とりあえず僕らは近くの喫茶店で話すこととした。
……。ああ、あのツイスターゲームのことを思い出してしまった。
元気かなあいつ

「吉井さん?」

「悪い。続けてくれ」

あのイベントから戻ってきた後、頭が真っ白だった。思い出すたび
すぐに真っ白になる。何があったんだっけな……とにかく、今は話

しを

「それで…今は大丈夫なんですけど、一度交通事故にあいかけてしまつたんです」

「…」、交通事故つて。どんだけやばいんだよ」

西山はあとため息をつきながらゆっくり田を開く

「なんでそんなことになつたんだ」

「実は…ちょっとスキップしながら歩いていたら石につまづいたやつて…それから起き上がった後風が吹いてでスカートを押さえるに必死で、早く立ち去るうと思つた矢先にボールが激突。ふらふらとなつていたら見事に車に衝突しかけたんです」

「ちょっとビビりじゃないだろ！なんだその多様な事故は…どんだけドジなんだよ！」

「これ想像以上に危ない…色々な意味でも危ないし彼女の何かが失われるくらい危ない気がする

ちょっとでスカートが風でつてなら…お前はそれよりもっとすごいドジをやつたことがあるのかと思つてしまつくらいだ

と、言つても彼女自身僕が出会つた女子達のようにグラマスだ。
つまりのままだと本当に危険だ

「もつとあるんですよ…聞きたいですか？」

「もう沢山だ。あたかも自分の自慢話しのよひに詮つな…」

「すみません…」

「はあ…早く解決しないとな」

西山は僕の発言にピクリと反応し見上げるよひに尋ねてくる

「何か用事があるんですか？」

「ちょっとゲームをね…」

「ゲームですか…。なら私も付き添いまー。」

「え? 悩みがあるだろ?」

「いえ… 吉井君の為なら後でも」

西山は朱を散らしながら慌ててストローを箇引瓶に差してジュースを飲む。西山の黒糸が綺麗に光つてゐるよつて思わず皿を飛ばす。

「で、でも急いでるんでしょ?」

「大丈夫です! 私のはこつで けほー。」

彼女はむせたらしく必死に咳をしている。何といふか色っぽい

「すみません… むせかやいました」

「こ、いや気にするな。それより本当にこーの?」

「はー ゆつやく吉井君に会えて私も嬉、……は、はは早く行きましゅつー。」

西山は慌てるのみ立ち上がり会計を済ませると僕の腕を掴んだままトタトタ走る。ところがやつて何を言つてたんだ?

「ちょっとあんまり急ぎすぎると」

「さあー。」

「やつぱりかあー。」

ドタンと転び僕が押し倒した形になってしまった…。ビンだけドジなんだよ…

「あ、ああのー。」

「……悪い……」

僕も僕だ。いつの間にかラッキースケベになつてないか？あ、でもさつきの感触は良かつたなあ

「あ、あまり急がなくていいぜ？」
「は、はい…」

ふう…彼女がまた何かドジらないよつと見ておかないと寿命が縮み
そうだ

「あの…吉井君」
「何だ？」
「どんなゲームを買つつもりですか？」

この時僕は…女の子に言えないゲームと言つてしまつたことを
深く後悔した

002（前書き）

「初めて彼女の肌に触れたのは

小学校の時だった。

」

鷲は鷹より強く、鳥類ではトップと言える……しかし、そらは空でのことだ

例えば地上で鷲がいるとしよう。鷲は飛ぶことができないとすれば地上では弱い生物に等しい。鶴がいい例だ。地上では早く、強く、気高い孤高の生き物が支配する

だが、この世界は空は狼、地上は鹿なのだ。地上や空でのルールなど存在しやしない

「あやあ！」

「つと危ない……」

ゲームショップに向かっている最中、彼女は何回こけただろう。數えたくないと思つてしまつ。さて、今の状況だが僕らはゲームショップにたどり着いた。が、彼女が入り口で再び転び慣れた手付きで支える

「あ、ありがとうございます！」

「全く……。さて、僕は買い物するから西山は待つてくれ

「えー？ 嫌です！」

見事に拒否される。女子に見せれる物じゃないんだいんだが、仕方ない素直に言おう

「いいか西山。僕は今から口『明久君！？』」

瞬間 愛らしい声が聞こえた この声はあいつしかいない。いや
！あいで確定だ

「おーい！明久 君！」

彼女…幼なじみの琴吹は遠くから手を振つている
問題ない！足はもう踏み出している！

「あきひ…！」

ボフンと柔らかい音が響く 僕は彼女の胸に飛びついたからだ が、
彼女はおつとりしている性格からボケーッとしている

「…もつ。転んだら危ないよ？」

「笑つて言える状況ですか！？」

西山はすかさずツッコミを入れる 確かに普通の人はそう思つが
彼女は気にすることはない

「だつて明…明ちゃん結構おっちょこちょいだから」

「違うぞ琴吹！お前はボケをかます場所がなんか違う！そして明ち
やんはやめろ」

明ちゃん…昔彼女が僕を呼んでいた時の名称だ 僕としてはあ
まり好きではない

「じゃあ…アキちゃん？」

「ダウト…その呼び方だけはやめろ…耳が千切れそうだ！」

「むつ…だつて、折角だからその、特別な名前がいいし…」

「だからといつて明ちゃんはなあ……せめて明様とか？」

笑つて答えるとジト目で見られた…うぐ！流石にこれは痛い！ガチ
で痛い！

「じゃあ…」

「までまで…まだあるのか！？普通に明久でいいだろ？」

「明久君が明様って言うからだよ？」

「すみません。すみませんでした本当に…せめてアキ君とかでお願いします…」

琴吹は満足げに微笑み頭を撫でてきた。く…この恨み絶対忘れない！

「あの…それより胸に顔が…」

こんな状況でも西山はツッ 「!!」を忘れなかつた

「…はあ…」

軽くため息をしながらゲームを探す 新作はここの中だ

「明久くんは何のジャンルを探してるの？」

「…………」

無視をしながら一つ一つ見ていく。結構他の作品と似ている系列がある為こまめに見ていかなければならぬ

「ね！明久くん！」

「…………いつの間にか明久に呼び方が戻ってるぞ」

軽くあしらい気になつたゲームも籠にいれる ふむ…このアク

ショングームは一人でも楽しめそうだ

「明久くん！聞いてよ」

「何？友達？はて…いたかな？」

「そんなこと誰も言つてないよ。あ、これとか面白そうだよ」

琴吹は頭が回る。だからすぐに切り替え僕に会わせてくれる

嬉しい

が

「待て琴吹！なんだこのゲーム！？」

タイトルは『君を呼ぶ俺』とふざけたタイトルでジャンルは恋愛

「明久君もつと恋愛を勉強した方がいいよ？」

「いや…だからと言つてこれはないだろ？」

「そうかなあ？じゃあ明久くんは何を買おうとしてるの？」

（その言葉を待つていた！）

行動早く素早く琴吹の頸を掴み人が少ない場所へ行く

「…例えばこんなジャンルとかだな」

「え？…あ、明久くん？」

流石の琴吹も同様しているのか顔が赤くなっている ゆっくり赤いスカートを掴みギリギリまで持ち上げる

「…！…あ、あああ…き久くん！だ、だだ駄目だよー！」

「駄目？僕はジャンルを教えてやるうとしてるだけだが」「だ、だからって…明久くん彼女いるでしょ？」

「彼女？…誰だ」

琴吹は手をはらい真っ赤な顔でパクパクと口を開く。薄い紅が異性の心をくすぐるかのようだ

「…」Bクラスの西山さんとか

「ん？知つてるのか？」

「うん……ドジをするけど成績は優秀だしあまけに美人さんだから」「へえー。確かに美人ではあつたけどあいつが優秀か（…）想像つかないよ」

僕が美人と言つたあたりで琴吹が微妙に落ち込んでいた……何故だろう？

「と、とにかく……明久くんは付き合つてるんだよね？」

「いや……全然」

「ほえ？」

「……………。ほつ」

ピラッとスカートを跳ね上げると琴吹は首を傾げていた。うむ……やっぱり琴吹はこのぐらいじゃ反応しないか

「明久くん？」

「少なくとも……西山と琴吹……付き合つとしたら琴吹だけどな僕は」

「……………へー？」

ボンッと爆発したように彼女の顔は真っ赤になり髪まで跳ね上がった
そこまで驚くことだろうか？
ちよつとま
てよ、馬鹿なのは僕じやねえか！

「……………」

「?…?、どうしたの？」

「あ、いや！別に」

色々考えていたら、視線が彼女に胸に刺さつた
なつた……あの時よりもとくだらないことを考えてしまい咄嗟に頭
を振りすぐに買い物を再開した

あれは小学校の時だ

僕と琴吹は幼なじみ関係で、ちょくちょく家に遊びに行っていた
いや、毎日だ当初、僕は彼女が好きだった…つまり初恋相手と言つ訳だ

まだ馬鹿な僕だ。色々誤解を招いたりしていた

そん中、上級生になり思春期まっさかりな時期…僕は興味本位で琴吹の体に触った
初めてではない。昔はお互いに背中を流しあつていたからだ。だけどその時はそんな幼い気持ちではなく胸の膨らみ…大人びてきた彼女に釘付けになつていた
は嫌がりはしなかつたが少し動搖していたのを覚えている 琴吹 それ以降僕はスカートに手はつけても女子に手荒なことはしない
どんなことがあつてもだ

「またせたな西山」

「いえ、気にしないでください」

ゲームショップから出た後、ベンチに座つていた西山の元へ歩く

「目的は達成したし、次はあなたの番だな」

「はい。よろしくお願ひします」

「え? 何処かいくの?」

「ん? ちょっとな。琴吹も来るか?」

「うーん…何するの明久くん?」

ニヤリと笑つてから太陽を眺める…琴吹と会えたのは良かつたかも
しれない

「 鶯を捕まえにいくのぞ」

003 (前書き)

「 その晩僕は…」

言葉からわかる通り凄く甘いです！バカ志よりもばいです
かなり危ないので読む時はご注意を

一年Bクラス…西山 美沙は一人だった…。いくら優秀でもいくら美人でも誰も助けてくれなかつたのだ。それもそのはず。彼女はあの…根本の彼女だつたからだ。だが彼女は好きで付き合つてゐるわけじやない

そして…そんな彼女の弱みにつけ込み鷺の妖魔が取り憑いたのだった。ドジをする…つまり優秀としてみれなくなりドジをし根本にふられ仲間を作りたいと言つ彼女の気持ちが妖魔に取り憑かれ実現してしまつた

しかし現実は何も変わらなかつた

「…吉井君。何処へ向かつてるのですか?」

「……学校さ。琴吹はわかるよな?」

「うんバツチリだよ」

軽く笑いながら撫でるとえへへと朱を散らしながら琴吹は満足げに微笑んだ。うむ…ムツツリーに撮つてもらいたいな

「西山…僕らは今から君に取り憑いた妖魔を除去する為に学園に向かつてるんだ。」

「……そなんですか」

「嫌か?」

「違います…ただ不安なんです」

西山の言葉に足を止めて振り向く。西山はうつむきながらポツポツ

と喋つてくれた

西山はもし妖魔がいなくなつたとしても根本と別れることができるか…友達を作れるか心配らしい

「ま、きつかけ次第だな」

「きつかけですか…」

靴の音が木靈しながら静かに響く。西山はうつむきながら左隣をトトと歩き、琴吹は右隣で腕を掴みながら歩じてこり

「あ、琴吹？歩きづらいんだが」

「…駄目？」

「あ、いや…駄目つてわけじゃ」

そんなつるつるした田で見るなー胸の感触が手伝つて簡単に理性が壊れそうだ！

「吉井君つて…結構おちやめですね」

「西山…それは僕に対する嫌みか？」

「違いますよ…ただ吉井君つて可愛いかなと」

「畜生！なんで僕が出会つ奴らはこんなことばかり言つんだああああ！」

しかしこれは後の悲劇にしか過ぎなかつた

「あやあー」

「いふー」

「あやー」

西山が踏み外し思い切り転倒する…その時僕も巻き込まれ…隣にいた琴吹も巻き込まれてしまった

「痛っ！」

「だ！」

「きやあ！」

起き上がり少しうかと西山が電柱にぶつかり後ろへ倒れる瞬時、僕の後頭部に拳が直撃…見事に琴吹を押し倒すように倒れてしまった

「あう！」

「あぶねえ琴吹！」

「へ？ひやあ！」

西山はだいぶ歩いていたらつまずいて転んだ。僕は自転車に跳ねられそうになり慌ててどくと琴吹の胸をわしづかみしてしまい琴吹は真っ赤になりながらピコハンを取り出し

パコンーと響き西山と僕に大きなごぶができたのだった

「ひや！」

「またか！」

「はわつ！」

次は西山が道を出た瞬間車が通り西山は後ろへこけて、車の音にびびった猫が逃げ去り、尻尾が当たり僕の頭に植木鉢落下 琴吹をまたまた押し倒してしまった

「あ、明久くん…」

「わざとじゃない！」

「……そこまでされると…わざとのような」

「いやだから「きやあー」だはつー！」

西山が再び後ろへこけて再び植木鉢落下…くそ…頭が割れそう

「…（フルフル）」

琴吹は赤くなりながら僕に掴まれた胸を見ていた。琴吹の胸は掴みやすく柔らかい…

「…あ、明久くん…」

「…」

ムギュッと力を入れるとピクンと琴吹が跳ね上がった…。琴吹は真っ赤になりながら目を白黒させていた

「ふあ…強くしたら…う…め」

力を更に入れると琴吹は甘い声を出しながら目をトロンとさせていた。琴吹から甘く優しく花のような香りがして…つい性心がくすぐられるてしまう

「あ…あ、明久くん…んあ…ど…どつしたの？…ひあん」「わからない…ただ何故か琴吹の体が気になつて…気づいたら…。もつと甘い声が聞きたい」

胸を揉んでいた腕の力を緩め…片手の人差し指でつつと彼女の体をなぞる

「んああつ…あ、あきひれ…くん…んん…あ…んん…」

「…」

彼女の声が更にくすぶる…つつと腰をなぞり…露骨に沿つてゆつくり彼女の下半身へ…

「…！？何やつてんだよ僕…」

「はあ…は…」

慌てて荒い息をする琴吹から離れると琴吹がゆっくり体を起し…す…向こうでは西山がずっと同じドジを繰り返していた

「 明久くん？」

「 …えと。これは…」 言い訳など思いつかない… 彼女の胸あたりに目が行き素早く逸らす

「 今日はやめよう。西山のあれはおそらく妖魔の力の副作用だ」

「 それって…」

「 あいつのドジを見てわかつたんだ…

あいつは寄生タイプじゃなかつたでこそ…」

西山を送った後、僕らはマンションへ帰った。西山には家で安静に…。明日迎えにいくと告げると西山は笑顔で頷いた

「 …面倒な妖魔に取り憑かれたな西山も

ため息をつきながら鍵を開けていると琴吹が俯きながら立っていた

「 琴吹？お前は隣だろ？」

「 わかつてゐよ…わかつてゐけど…」

「 はあ…仕方ない僕も悪いんだし…上がつていけよ

「え…？でも」

有無言わせる前に腕を掴み僕の家へと入れゆつくりドアを閉めた
力チャ力チャ鍵とチエーンを閉めていると琴吹が後ろから抱きつい
てきた

「 明久くん…抱いて」

「 …無理に決まって…んぐ」

琴吹が言わせまいと口づけをする…甘い…柔らかい

「 んう」

優しかったキスは次第に濃厚なものへと変わっていく…舌でかき乱
し…絡み合い…クチュクチュと水音が響く

「 ふあ…」

甘い声が玄関で響き…更に刺激すると琴吹は力が抜けるように沈ん
でいく

「 ふはつ…」「じや駄目だよな」

「うん…」

弱々しく頷いた琴吹を抱き上げリビングへと向かう…

わからない…わからないけど何故か…琴吹を抱きたかった

ドサッと優しくソファーに寝かせ上からつこぼむよひみロ元ひみロづける…
琴吹きは目を潤ませながら見上げてくる

「 明久くん…私」

「 ああ…」

彼女のカーディガンを掴みゆつくりと脱がしていく…キャミソール

…スカートを剥ぎ取つていくと彼女の薄い水色の下着姿が露わになる

「……いーのか？」

琴吹は「クンと頸き…」言つが早く彼女の胸を揉むよつに握る

「あ…ー…やつ、ひやー…」

「クリと唾を飲み込み揉んでいくとひきしつた喘ぎ声が聞こえる。彼女の本来の白い髪が揺れ…赤い瞳がトロンとなる。つこ苛めたくなる

「…ぞくつとするよ琴吹。下着越しからでも柔らかいんだな

「ん…あー…い、わない…はん！…でんあ…」

首にリップ音を立てながら膝に座りせせ柔らかい胸をむしむしと揉む

「はあん…あ…きひわく…ん…つ…んああーぶ…ブラを」

「…流石に直はできない」

「…んああー…ね、お願い…ああー」

つつと指で露わになつた彼女の肌をなぞつてく…やつせよつも高こ声が響く

「…感じてるのか？」

「違…んああーは…ああー」

琴吹のショーツをなぞりゅつくり付け根まで這わせる…自分でも何がしたいかわからない

『 性苟…お互ひの性欲がくすぶらた時、狼と鹿の起こす行動…』

契約者もしかり』

その晩…僕は琴吹の大人びた体を触った…ただ弄つただけでこれと言つたことはしなかつた
でも…琴吹のことが余計に頭から離れなくなつてしまつた

〇〇三（後書き）

いかがでしたでしょうか？こんな感じでやつてこられたこと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8448z/>

バカと妖魔と召喚獣～狼少年と白き鹿～

2012年1月5日21時47分発行